

【資料紹介】

下冷泉家歌学と二条流

——上冷泉家門人と出題一件史料——

藤 本 孝 一

一、はじめに

本稿は、寛延二年（一七四九）に起きた、下冷泉宗家（一七〇二—一六九）が上冷泉家の門人になり、それに伴う宮廷での歌題を出す事件に關した史料紹介である。

下冷泉家の成立は、辻彦三郎著『藤原定家明月記の研究』（二七七頁、吉川弘文館。昭和五十二年五月刊）に収録されている『冷泉正統記』（宮内庁書陵部蔵、奥書に「天保六年（一八三五）三月下旬三代門人大進匡聘」とあり、上冷泉家の門人による編纂である。）に、

○為尹卿子三人あり、（略）其（為之）弟持為卿は両兄に勝れて幼年より才智有て父の愛子たり、伯父為邦

朝臣の跡二条家を嗣て、其伝はる所の秘笈を携へ、御子左と称号し給へり、其先為氏卿の子大納言為世卿、大祖長家卿の称号を取て御子左と云り、其子中納言為藤卿又御子左を称す、為藤卿の实子為明卿二条中納言と云しか、子なきに依て為邦朝臣其跡を嗣たり、され共又其子為尹卿冷泉家に復したる故、為明卿繼たるを、爰に持為卿に繼がせ給ふ、且又御子左の正統為世卿より左中將為道朝臣、権大納言為定卿、権大納言為遠卿、左中將為衡朝臣にて是も絶えたれば、為氏卿の家系相統のため、持為卿御子左の家を起候はせけん、され共采地ない事を嘆きて、父為尹卿の許に帰り給ふ、爰に於て父卿哀れひ、播磨州細川庄を授与へ冷泉と称号しける、是下の冷泉と云るの祖也、

と、翻刻されている。

二条家は、冷泉家の歌学と対立していたが、冷泉為秀（？～一三七二）の子息為邦が二条為明の養子となって二条家歌学を継いだ。しかし、為邦の子息為尹（一三六一～一四一七）が為秀の跡を継いだ。また、為道・為定・為遠・為衡らの各二条家が断絶した。さらに二条家の歌書類が冷泉家に譲渡された。それにともない、為尹は三男持為（一二四〇～一五五四）に二条家の歌学を継がせた。この事例に、持為書写本系統の『伊勢物語』等の注釈書は二条流である。さらに阿仏尼像と『十六夜日記』と共に細川莊を家領として分家させた。しかし、二条家歌書類は上冷泉家が継いだ。正式には「冷泉家」であるが、二家を区別するために、本家を「上冷泉家」、分家を「下冷泉家」と通称した。下冷泉家は二条流の歌学であった。

二、上冷泉家入門

寛延二年に下冷泉宗家が上冷泉為村（一七一二～一七四）の門人になると共に宮中出題の一件の史料が、冷泉家時雨亭文庫御新文庫の「秘新函」に三冊二通が収納されている。

ここに『下冷泉家之事』一冊と折紙を翻刻する次第である。次に目録を示す。

- 1 「御新秘新函お2388」『下冷泉家之事』（翻刻）
【法量】縦三〇・二センチ横二〇・〇センチ。全紙二九丁、前遊紙一丁後遊紙一丁。斐紙。鼠色地包表紙袋装。外題なし。
- 2 「御新秘新函お2389①」折紙『下冷泉宗家折紙』（翻刻）
【法量】縦三一・九センチ横四六・四センチ。楮紙。
- 3 「御新秘新お2389②」折紙『飛鳥井雅香折紙』（翻刻）
【法量】縦三三・四センチ横四六・一センチ。楮紙。
- 4 「御新秘新函お2390①」（出題一件の草稿）
【法量】七丁。縦一五・一センチ横二一・二～一三センチ。袋装大和綴。斐紙。外題なし。
- 5 「御新秘新函お2390②」（出題一件の清書）（一部翻刻）
【法量】五丁。縦一六・五センチ横二三・四センチ。袋装大和綴。楮紙。袋入り（表紙に「寛延二冬／宗是負事／（為

村花押」縦三〇・四センチ横一六・八センチ。裏紙継に陽刻「冷泉」の朱印一捺あり。

三、出題

同年九月下旬になり、宗家が宮中の歌題を担当したい要望が出された。顛末については、5「御新秘新函お2390②」(出題一件の清書)の表見返にまとめられている。句点「」は墨線。その全文は、

抑公私和哥題、自古来累代連綿進上之事、飛鳥井家当
家之儀也、當時之先達邂逅被出題候儀、格別之儀也
(但不称題者)、藤谷家者、近世代々有出題、飛鳥井家
当家共二故障之節也、先年故通躬公、故実蔭公被補闕
之義も有之、先達之所作候、格別之儀、為家業進上之
儀、両家二限候、然二今度宗家卿、漸昨今冷泉家説隨
從而、早速有出題之望、往昔雖被出題、中絶歴年代、
殊沈淪之家孫、猥被預企之義、理運之振舞、不知案内
之一件候也、縦雖一ヶ度、於下冷泉家出題之義、再興
不可然二付、若飛鳥井家当家共二障之儀有之節者、被
任 思召、於出御題歟、若者先達之出題、又者、以
近例、藤谷家可被 仰下歟、下冷泉家出題之事、永不
及御沙汰義、穩便之事也、先彼家二出題候、伝説無之、
の事件が持ち上がる。

『下冷泉家之事』によるとこの起こりは、七月二十八日に為村が桜町院に参上した折、民部卿宗家が御点を望んできたことを知らされた。しかし、下冷泉家は二条冷泉両説である。二条流をやめて冷泉家流にするために、為村の門人にするこのの仰があつた。為村は享保十六年(一七三二)頃に、宗家が盤元院に御点を望んで父為久(一六八六―一七四一)の門人になる要請があつたが、宗家は望まなかつた。為村にしてみれば、今更の感があり拒んでいたが仰ごとのため、ついに門人になることとなつた。

二条冷泉兼用となつた理由を家の継承のために、中院家や三条西家に入門したためであつたと弁明している。が、やはり家の成立時のことは秘している。宗家は八月八日誓状の起請文を提出して冷泉流の歌学になつた。次に、歌題

為村伝申之儀、今度之子細、甚不叶道理之間、難致免許、仍一件之端書ニ注之、後孫猶可存之、

寛延二年十一月 為村

とあり、宮中で行われる公宴和歌や月次の題は、冷泉家と飛鳥井家が出題し、障りのある時は藤谷家が担当したとある。歌題を出すことが一時許されたが、抗議により延引となった（2『宗家折紙』）。以降も歌題を提出することがなかった。

以上が顛末である。

四、まとめ

ここに紹介する史料は為村がまとめたものである。じかに史料を読んでいただいた方が、宮中における出題の重要性がわかると思い紹介する次第である。

下冷泉家の設立時の時から二条家歌学を継ぐために下冷泉家が成立した。明確に史料では記述していないが、二条冷泉兼用は、当初からであろう。

宗家が上冷泉家の門人になった理由は、宮中の出題の為であったことがこの史料群からわかるのである。江戸時代

の宮中での歌題がいかに重要であったかが判る。冷泉家時雨亭文庫の御文庫には、上冷泉家が江戸時代に提出した勅点詠草はほぼ伝存している。

和歌の題の重要性がこの史料群から明確に読み取れるであろう。

【翻刻】

「凡例」

一、勾点「ゝ」と頭書「●」は朱書。

一、「仰」などの欠字は一字空けとした。

一、「朝」などの改行（平出）は行を改め、文章を詰めた。

一、「◇」で割注か右寄せを、改行は「／」で示した。

一、読点は筆者が読みやすくするために打ち、新字体に改めた。

『下冷泉家之事』

表紙外題なし。

（前遊紙一丁）

下冷泉家之事、当家累祖村雲大納言為尹卿三男持和（後改／持為）、父前大納言（応永廿四年正月廿五日／薨）、于時家兄為之（廿五歳／侍従）、家弟持和（十六歳／童形）、子

孫相承六代之後、至為將、既及斷絶（慶長之／初也）、為景辱蒙

朝恩、賜細野号、為新家（寛永七年十二月十日元服十九歳／為景者下家五代為純之孫、／妙寿院惺窩子也、惺窩者／本禅僧後還俗）、為景（卅歳／余）正保之初、再賜下冷泉号、断絶相統（自慶長初至正保初／断絶廿年余）、実子為元有子細、不遂相統之故、葉室前中納言頼業卿三男（頼広）為養子相統（寛文十年八月廿三日改為直／同月廿八日元服

十七／才）後改為純）、至此時、累祖之血脉絶了、可惜々々、其後与本¹才家失親服、忘同流之事、相統之身、不知案内而、慙論嫡庶之意念加増、殊於哥通不快之事、逐年不穩便、然而宗家（為經二男兄為俊依病／辞官位之後奔）少年之時（父没後）、歌道之事、随從之鉢而、似信当家説談、亡父卿既講師之事、受口授之後、逐年疎遠、別心之鉢顯然、宗家（廿四歳／享保十年）

内院和歌御会被加御人數了、詠哥者蒙中院家教訓（為故通躬公弟子）、享保十六之比、辱

靈元院御点拝領（依頭／望也）、崩御之後、復中院家、通躬公被薨之後、三条西家入門（為故公福卿弟／子）、此時¹亡父卿諸家之哥、添削之節也、当家人門正理之处、依別

存入門無望之由、申随從公福卿、彼卿被薨之後、烏丸家入門（為光榮公弟子）、光榮公被薨之後、詠哥不能進上（當時詠哥可有相談方無之、於不賜／御点者、不本望之由、彼是有過言云々）、於家説作法者、弥伝説二条冷泉兩家之説、相混用之事、為經已來、今猶信之、持為之末孫、蒙冷泉家号之人、依誰之諷諫兼而説哉、更非正説、妄説不正、於哥道可謂邪魔者也（從去年三月至当／八月哥道廢学之、／人不及御沙汰、

父為經者、以惺窩遺念、專儒学、次信哥道、雖然論嫡庶之興趣、有之故、哥道之事、／不随從于当家、不快之儀、多年不止、宗家（茂）少年之節者、專儒学、父子共有試作進¹、²才

御点之事、頼依願申、及御沙汰而説兼用之浮説御不審、先被尋探宗家心中之儀、事之發端也、

寛延二（己巳）年七月廿八日、申半刻参院（刻限院可／参之事、／伝奏八条前中納言隆英卿／兼而被伝仰）、酉刻参上、召御前、

●民部卿詠哥御点願望也、仍被召寄、被尋下条々、年来而説兼用子細有之哉事、於執心者、一流之説信仰可然事也、二条家説於信仰者、冷泉称号如何、冷泉家説勿論可有信仰

事、叶正理家說真実、於信仰者、隨從於為村而、說々可信仰、入門之所存可然、²為村所存、猶可被尋下之由、民部卿（江）被 仰開之間、（為村）領承之有無、可言上之由、巨細被 仰下、

（民部卿於御前、謹奉入、猶退而可言上之旨、被 仰含云々、）

蒙 仰之旨謹畏奉、退而可言上之由申、退入、謁八条前黃門、仰之趣演說、畏存旨申、但即時領承之有無難申、子細有之間、猶明日致言上度由申畢、退出、

廿九日、參 院、謁前黃門、昨夜蒙 仰之儀、奉入所存之子細、書連附彼卿言上、

●今度、宗家卿当家正說、依懇望、令列門弟子、家說³才教訓之事、可領承否之儀、謹奉存候、不才之、（為村）辱蒙 仰、過分之至、面目不過之、畏恐入存候、宜預御沙汰候、乍然、即刻難領承、申子細有之、亡父（為久）存命之時、門弟無望之由申之後、於道隔意歷年月候、然所对、（愚子）有何之望而、門弟家說懇望之所存候哉、甚不審候、仰畏謹奉存候得共、於心 仰者、背父之命、於守父之命者、背 仰、一身之非礼、窮迫難涉候、更非私之宿意、存道之恐

故也、但戸部実改当道之非法、令信仰嫡家正說、尤不混他之說、真実崇敬之心底候哉、以虛薄之人、為師弟之約事、道之恐不少、（為村）小心愚痴而疑惑難散候、願可被糺明実虛（欺）、³真実之心底、明白顯然之上、於蒙 仰者、可為門弟之約候、於実虛、不分明者難領承、申此旨趣、乍恐窮切之余、謹言上候、宜御沙汰、伏願存候也、

八条前中納言殿

為村

即刻、及披露被 開召之由也（中書王 烏丸中納言等面會之節、／子細談之、民部卿進上之一紙（昨日之請書也）、以前黃門、被為見下、則令熟覽、

言上

●二条家冷泉家兼用之事、⁴才

当流二条家冷泉家之說、兼用之旨、申伝候得共、於此儀者不分明候、天正年中依乱世、被奪家領、当家暫中絶、（宗家）曾祖父（為景）冷泉家再興被 仰出、其後哥道之儀、二条家之先達、為師受教訓相學候、自師家之說相守、近代二条家之說用來候、然二条家伝授於難相叶者、自今二条家之說相改、冷泉家之家說、專一可相守候、然

上者、同流右衛門督（江）無二心、隨從仕家說、承知仕度候、右衛門督亦無覆藏、相伝之様（二）仕度候、雖然、只聊之家說（ヲ）受、和歌作法（斗）如冷泉家仕候（而茂）、後々道之相伝無之、哥道不成就之義（而）者、乍恐不本意奉存候、今度蒙⁴⁷勅言冥加之至、不堪感、佩唯偏奉仰 御憐愍而已、

宗家

右文言不分明而、理不正不知案内故（歎）、於道甚不快之文段、恐存之旨、（愚存）一々以正理、申述了、其旨前黃門有言上之後、召 御前、參上（前黃門同伺候）、猶又依仰、掃心底言上了、戸部之文言、不分明之 御氣色也、退入、

（卅日、參院、謁前黃門申云、昨日被為見下、戸部書面文段、（愚存）雖申述、為後々書連之一紙附之、

●宗家卿言上之一紙被為見下、（為村）所存無之哉之事、被尋下、謹奉畏、熟覽候處、文言浮虛存候、二条家伝授於難叶者、自今冷泉家說⁵才可相守之文言、就中不審戸部之二心顯然候（歎）、元来二条家伝受雖願望、依不叶冷泉家說、可相守（与）之事々存候、然者両說之内、何（とも）叶候方、可相守（与）之、申分候哉、下冷泉

家相統之戸部、仮（にも）申間敷事（云々）、冷泉家相統之人、檢置先祖之說、望二条家之伝授、定而其人之力、満足之故、所信有之候（与）存候、先祖已來信仰之說棄置、望二条家伝受事、不才無力不知之案内、（為村）不致弁候、若又於浮虛者、持為卿以來之家說棄置、以彼二心、言上之事如何候、端之文段、一向不足申、不知案内之事候、乍去於不申者、（為村）仮無所存候故、少々申候、下冷泉中絶、歷數年之後、為景辱蒙御取立之 朝恩（卅才余）、賜下冷泉号、相統仕候、彼為景尤無二心、信持為之流候（持為流ハ／為相余流也）、証有之候、戸部（ハ）為景之趣意（ヲ）⁵ウ不存知（候者）歎敷候、縱雖守師說、子孫永々可守二条家說（与）者、申置間敷候、但申置候哉、然者只今迄、以何之先達之說、二条冷泉両說兼用來候哉、此文言両說兼用之事申述候、文言（とハ）難見分候、只二条家說用來候事、已申立候（と）存候、且不明之儀（と）書注候一段、以不明之儀、用來事候ハ、汚家說候事、冷泉両家之瑕瑾候、両說兼用之義、実虚明白（二）存度候、奥之文段未不至其沙汰事候、乍恐書付進候、昨日言上之儀候得共、為後々、書認候、猶及御沙汰候ハ、可畏存候、此節之儀、随分相

慎候、所存候得共、若過言之儀、可有候哉、恐存候、宜預御沙汰、偏希存候也、

七月卅日

為村

八条前中納言殿」6才

昨廿九日、〈為村〉所存言上之趣、民部卿〈江〉以前黃門被仰聞、被糺明実虚云々〈昨日、内々右衛門督所存、被尋候処、故大納言／存命之時分、門弟之望、無之旨申之、然処、今又／門弟家說懇望之所存、甚不審之間、御請難申候之由被申、当家正説を信仰／不混他之説、真実崇仰、心底明白顯然之上、於蒙仰者、可為門弟約候旨、被申候〉、右之旨趣、以書面、昨日被尋下之、答書今日持參〈云々〉、召御前〈前黃門伺候〉、一紙被為見下、熟覽、

●冷泉故前大納言為久卿存命時分、門弟不相望之事、右衛門督不審之由、当家〈為景〉以來二条家之先達、為師哥道相學候〈為景／儀〉、中院通村公受教訓候、亡父〈為經〉始日野弘資卿為門弟後、中院通茂公受添削候、〈宗家〉自若年、中院前右府通躬公蒙教訓、年久相學候、其上三条西家道遙院入道内府〈与〉政為互懇切之事、以其旧縁、三条」6才故前大納言公福卿〈江〉自若年、内々受指南候、其時〈為久卿添削、不被／免已前也〉、依之、

通躬公被薨之後、三条公福卿〈江〉直門弟熟望仕候、公福卿被薨之時分、為久卿被命〈二〉而無之候、仍烏丸故前内府光榮公為門弟、蒙教訓候、多年二条家之說相學候、

右之通之子細、故為久卿存命之時分、不相望事〈二〉候、

今度二条家伝受難叶之旨、冷泉家之説、於相學之真実之執心、以次第、右衛門督〈江〉可有仰之旨、奉之候〈二〉付、後々受相伝、哥道成就之事至〈テ〉、本望難有義〈三〉存候故、今度更冷泉家之説、可相守旨、申上候事、今度依仰、二条家之説相改。冷泉家之家説、於相承者、不混他之説、冷泉家之説、真実信仰、勿論之事情、

七月卅日

宗家」7才

八条前中納言殿

右文言亦不分明候而、道理不正之故、〈愚存〉不殘心中、乍恐言上〈不及／書面〉、被聞食、道理至極、被思食之御氣色也、乍去巨細於申理者、先々不及吟味事共、於今難洩之子細、委細被仰聞、自今以真実、於隨從之志者、存有可領承〈歟〉之、仰無拋之故、謹奉入可領承〈歟〉、猶退〈而〉可言上、弥於領承申者、〈為村〉願旨有之由言上、退御前之後、更參御前〈前黃門未被退／御前〉、願旨之一紙附前黃門言上、

●再蒙 仰、謹奉存候、但於真寔之心底者、奉驚諸

神明可盡誓言儀存候、其誓言者、近世称家說「一条冷泉」⁷兩說兼用之儀、無其謂、背先祖之教訓、疑惑遺子孫之非法、後悔恐誤、且蒙冷泉称号上者、勿論對一流之嫡家、至末代、無非礼之儀、令信仰累代正說、改年来之所存、哥道習練、長久之存念、真寔無相違之旨、可有誓狀事候、不限此義、尚不殘心中、書誓言可書顯義候、言上者不才之、《為村》猶以深畏入、可領承申候、猶又至後々、兩家之間、以上冷泉焉、師家之証、此時乍恐願申候、過言恐存候得共、《為村》存先祖後、孫恐後々之違乱之故也、於不苦者、以此旨、宜御沙汰謹願存候也、

八条前中納言殿

為村

即被為披露、猶可有御沙汰之由、謹奉退、⁸

誓狀書認、《為村江》可遣否之事、以前黃門被尋下、戸部所存書面一通、於 御前被為見下《前黃門伺候》、文言如何之事、雖有之、不及言上、

●先刻之書付、右衛門督《江》被為見候處、家說信仰之上、於遣誓狀者、無覆藏、尤伝家說之旨申上候《二》付、誓狀仕候哉と

御尋之旨、謹奉了、誓狀之義、哥道無他信仰、家說真寔、

崇仰不混他說、家說專一可守之旨者、成就書付可申候、其余右衛門督文言《二》好等有之、雖書述子細、於有之者、難書付存候、此旨宜御沙汰被人存候也、

七月卅日

宗家

八条前中納言殿⁸

誓言之旨趣、文段可望申之事、蒙 仰之間、附前黃門言上、●宗家卿為門弟上者、誓狀之文言、可望申之由、無子細入門候得《八》、不及望申候得共、寔虛不分明之上、辱蒙

仰候故、謹奉別紙書認候趣誓言、猶又不殘心底、書加候樣、於及御沙汰者、為後々畏存候、且昨今兩度言上之文言、不分明候得共 仰重之故、謹奉重而不申不審存候、於誓言者、右之所望不被除、又言及御沙汰候樣、偏願存候、別紙之通、難書附之由、申候得者、則不寔候、此儀只非当前之儀、依事当家之瑕瑾、一身之大事《二》相成、大切之儀、⁹ 至後々、家之妨道之妨有之事、不容易候、嚴重之誓狀 真寔明白顯然之事、專一《二》存時、宜於致不寔者、不為本懷候、及大切之期候間、不願恐謹々申候、《為村》迷惑之心中、御推量之上、宜預御沙汰候、寔虛嚴重被糺明盡誓言之趣、寔候上者、尤領承之

覺悟候、宜御申沙汰、伏願存候也、

八条前中納言殿

為村

誓狀之案文（別紙）

●今度蒙 院宣、冷泉家入門受教訓之事、畏存候、為門

弟子上者、猶々改年來之不実、一流之正説、可令信仰候故、為久卿在世之時、入門其望無之由申、不入門之儀、於今生」9才涯之誤、背道之理、恐存候、依 仰入門之期、至対人為村」朱面申候為同流之上、乍蒙冷泉称号、不信先祖之正説、近世称伝説二条冷泉而説兼用之妄説、背先祖之教訓、疑惑遺後孫之非法、今以恐存候、自今以冷泉一説、專令修行、尤不可混他之説候、勿論対一流之嫡家、永不可存疎意、改非礼之所存、哥道習練、長久之存念、無相違候、被伝之師説、他人者勿論、雖為一子、堅伝申間敷候、此後対一流嫡家、不可致非礼候、至子孫此条々可相守之旨、可申伝此旨、（宗家）誓言若於不実者可蒙」

10才

御罰者也、仍誓言、如件、

年月日

名字

則被逐披露之後、召 御前（前黃門伺候）、案文明日民部卿（江）可被為見下、但神号可為何哉之事、被尋下、

謹奉（為村當時輕服中之間、／憚言上）、被許之間、言上、

●日本國中大小神祇別而者、住吉—玉津島—

氏神

右可然存候、但此度之誓言候間、先祖（茂）書加度之由言上（先祖之名号書連候も、如何之間）、先祖之咎（与）有度由言上、被 聞食、明日清書（案文之清書也）、可持參之由」10才

仰、且以墨滅之文言、於不苦者、除彼方可然之由、委蒙

仰、可除文言之事言上、退 御前、退出、

八月一日、參 院、案文之清書持參、以前黃門、獻

御前、其後召戸部、於 御前被為見下（御書院／出御云々）、後召（為村）、被召民部卿案文、被為見下之處、申子細有之由、被 仰聞、就中年來之不実（与）有之事、不存弁之由、言上（云々）、但他人者勿論、雖為一子堅一、此文段不被免已前、堅他（江）伝申間敷候（与）有之、可然（与）仰有之、奉存之旨言上、入御召御小書院（前黃門伺候）、戸部不審申之文段、元来不実之心底、不審之意、先此段（三）11才有之候（与）被存候、（為村）書題之不実之儀者、而説兼用之事候由、申前黃門附片紙書面、

●改年來之不実、一流之正説可令信仰候、

〔此文言不実之二字之儀、年來以二条冷泉兩説、被兼用之説、於不正説者、非不実哉、但年來兼用之説、実正説候哉、於被受冷泉家説者、不実之説也、仍正説可令信仰（与）之文勢候、文段之内、近世弥伝説—妄説（与）有之序之文段也、〕

言上之旨趣、尤之事被 恩命、年來兩説兼用、勿論不実也（与）之 御氣色也、彼是有 仰後、退 御前、

民部卿案文拜見之上、早速所存難申上、明日迄被願延引（云々）、仍今日先（為村）退出、

二日、参院、召 御前、彼是有 仰（巨細不注之）、¹¹民部卿参上、拜見之案紙之文言、難書之由、彼是被申子細事有之（云々）、元來不実之心底、難改之故、暫狀之文言、不叶意有忿怒之氣、発怨念之言之由、生來之実意也、然上者、門弟之事領承、雖申再三蒙 仰、過言甚恐存之上、重而辭申之恐雖有之、謂道謂家、不容易之儀、身退而可辭申之外、無他之所存、不才短慮之所為、愚痴窮迫之余也、恐懼而退茅屋（亥刻斗也）、其後之儀、不知之、
三日 今日（巳半刻）可参院之由、前黃門被伝¹²召、先奉存之旨、申答之後、称所勞、不参、

五日、今日小番称所勞、不参、

未刻斗、從前黃門書狀到来、

狀云、（尚々、於 御前書付申候也、）

（●於 御前被尋下後、有之候間、被扶所勞御参可被成之／仰（二）候、所詮御参可然存候、尚 御前（江）被召候、別可申承候也、

八月五日 隆英

右衛門督殿

（尚々於 御前被書付之由承候也、）

披見謹奉返答、（於 御前被尋下之儀有之旨、扶所勞可参之由、／仰之旨、謹奉存候、所詮院参可然之由、被示聞承候、／所勞相扶可令参之間、御前（江）被召候已前事候、可承候也、 八月五日

追申、所勞之条可有遲参候也、

此間再三蒙 仰之上、過言恐多殊一昨日不応召、¹²今日亦不参番令屈居之处、以 御慈憐扶所勞可参之召有之事、慈恩廣大之儀、恐入謹奉、今日不応召者、違背之重罪難逃、不叶道之理之事、更沐浴結髮散屈居之思、着布衣参

院、先謁前黃門 厚恩潤余之御沙汰奉之、恐々謹奉要談、移時後、被召之由、彼卿引導、參 御前敬屈 御氣色、如常畏存謹伺候、

仰誓狀之文言、此間之通、難書附之故、民部卿答、甚及遲滯事、不安之故、右之案文被書替、被為見下之處、戸部承伏之、加筆可熟覽之由、被為見下、¹³⁺

●今度辱蒙 院宣、為冷泉家門弟受家說之上者、真實信一流正說、不混他之說、哥道習練、長久之心願候、被伝候說々、不被免已前、他人〔江〕堅伝申間數候、対師家此後、不可致非礼候、〔宗家〕勿論猶至子孫此条々可相守之旨、可申伝候、此旨若於不実者、可蒙

日本国中大小神祇——

●右衛門督〔江〕遣誓狀之事、此案文之通〔二〕而、為村卿向後忘遺恨、無別心覆藏、家說於可有相伝者、書付可申候也、 八月二日 宗家

八条前中納言殿¹³⁺

熟覽之上、所存無覆藏可申盡之由、辱蒙 仰之間、不顧憚謹言上、以此誓狀一通領承難申、先達〔而之〕案文之中、両說兼用之誤、亡父存日入門此望之由申之、後悔等難除之旨言上、被 聞食了、此二ヶ条者、怠狀可被書誓狀〔并〕

怠狀等可被 仰付之由、被 仰聞、謹奉然上者、最初之文言、聊之相違已而、意趣無所殘之間、〔為村〕再無申旨、但一流嫡家〔与〕候所対師家〔与〕被替候、尤師家之二字、浮畏入存候得共、願者一流嫡家〔与〕有度旨、再三言上、道理尤之儀、勿論廿四字難除所也、然共此四字民部卿難書之由、可申上、只此四字之有無故、一件不落着之事、甚¹⁴御心勞之 御氣色也、於一流嫡家者、可賜其証之間、〔為村〕和順領承之事、委蒙 仰謹奉、此上者、重不申所存、早速可領承之旨申前黃門、猶又所存治定可申上之旨 仰也、且家說申伝之上者、詠草可賜御点之間、両說兼用相改、随從冷泉家說之事、誓狀進上之事、可被 仰下、中絶再興〔与〕被書候儀、〔為村〕所存無之哉之由被尋下、尤所存無之、嚴重堅固之誓狀、及御沙汰可然之事言上畢、前黃門相共退 御前〔御庭御遊覽／臨幸于止々齊／召彼所〕、出番所、尚又談前黃門、明後七日參上可言上之事示談了、亥上刻、退出、¹⁴⁺

〔六日、今日 靈元—御正忌日、仍無御沙汰、
〔七日、午時、參 院、一昨夜於 御前言上之旨趣、愚存治定以一通申前黃門、

●民部卿附〔為村〕候、誓狀之案文被為見下、辱熟覽

仕候、案文之通、公認無子細存候、但兩說兼用無謂事
〔并〕亡父〔為久〕存命之時、門入無望之由申之儀、
不叶道理事等、弥存誤候事候者、怠狀猶及御沙汰候者
可辱存候、且對師家之文言、對一流、嫡家〔与〕有度
文談候得共、此義者、彼是辱仰之上者、案紙之通者、
無子細存候、此一件彼是被盡 御慮恐入存候、為通為
後〔と〕不殘、心底之多言、心外之過言非礼等、深恐
入存候、¹⁵才以御憐愍、諸篇 御赦免之御沙汰、宜御
申御沙汰、伏謹願存候、此上者、民部卿不申子細書、
認穩便相濟候〔へハ〕、珍重之儀存候也、

八条前中納言殿

為村

怠狀可被 仰付案文、被為見下、所存無之旨、右之紙面之
余紙令加筆〔於前黃門傍書加之〕、

●於 御前、拜見仕候怠狀之案文所存無之候、

八条前中納言殿

為村

案文

●今度於 院御前、委細奉仰候、勿論為同流之上者、可
信¹⁵先祖之正說處、近世為伝説信浮説、二条冷泉兩家
之作法兼用候事、実無其謂通之冥加、甚以恐入候、殊故
為久卿在世之節、勿論可入門事、道之正理可叶先祖之教

訓儀候、〔宗家〕不入門之儀、今更誤入候、此度於 御
前、奉 仰、始開朦候、自今改年來之所存、長可受家說
候、別暫狀進之候也、

右之案紙、被為見下之處、承知之書面有之〔云々〕、

●遣右衛門督一紙御案文之通、内々蒙 仰之上者、
此通書付可申候也、

八月七日

宗家

八条前中納言殿¹⁶才

召民部卿暫狀怠狀等之事、以前黃門、被 仰聞、彼卿以正
理、被申之間、改邪佞之意発起、始而承伏暫狀怠狀等、可
書之由被申〔云々〕、秋日易暮、漸初更之鐘聲、報時之間、
明日可有御沙汰之故、各退散、即刻退出、

〔八日、巳刻參 院〔内々存知之故、／着奴椅〕、同時戸部
參 院午半刻 出御于御書院〔御小直衣／着御〕、依召先
候、孔雀之間、前黃門伝

院宣、●今度依願、民部卿詠哥賜 御点之事、可被 仰下、

於家說者、〔為村〕可教訓之旨也、¹⁶才

右謹奉入畏存之旨言上、以新中納言〔光胤／卿〕民部卿
〔江〕被 仰下

院宣、●依願望、詠哥可賜 御点、於說者、信冷泉家從右

衛門督可受之由云々、

右謹奉入畏存之旨、言上之由聞之、

民部卿依召、先候孔雀間〈予列座〉、依召兩人相共參
前、先是中書王伺候、新中納言前中納言等侍座、兩人共幾
久敷愛出、思召之 御氣色也、畏存之旨、兩卿取計言上、
中書王命、兩家自今和順長久珍重之由、被^{17才} 御氣色
也、兩人共申畏、謹々退入、於便所、謁戸部、今度之御沙
汰相共畏存之事、喜悅和談申合〈去月廿八日已來、同時雖
參上／不及面會、為穩便也〉、自懷中、被出一通被渡之、
令披見之処、怠狀也〈奉書／横折〉、

怠狀云、

〈今度於 院御前、委細奉 仰候、勿論為同流之上者、
可信先祖之正説処、近世為伝説、信浮説、二条冷泉兩家
之作法兼用候事、実無其謂道之冥加、甚以恐入候故、為
久卿在世之節、勿論可入門事、道之正理、可叶先祖之教
訓儀候、〈宗家〉不入門之儀、今更^{17ウ}誤入候、此度於
御前、奉 仰、始開臆候、自今改年來之所存、長可受
家説候、別〈三〉誓狀進之候也、

八月八日

宗家

右衛門督殿

右深志之事、尤〈三〉存之旨申答握掌、猶入門之事々和談、
前中納言被出會、兩人同様、畏悅之拜謝申之、以表使女房、
畏悅申於新大納言〈保子〉局怠狀一通、以前中納言入 御
覽、有 御覽返賜、猶懷之怠狀之答書一通、於便所、附戸
部披見、有謝礼之詞、被握掌〈猶以前中納言被応／御覽可
然之由申食〉、^{18才}

答書云、

〈今度師弟至可約申之事不才之、〈為村〉過分之至候得
共、依 仰領承申候、以伝來之家説、幾久敷可申入候、
御習練長久專一候、且故前中納言在世之節、入門之儀
不被望、此度被入門候〈三〉付、御紙面之趣、御丁寧
之儀〈三〉存候、尤無隔意、別心説〈三〉可申伝存候、
御直〈三〉そ、ひ珍重存候也、

八月八日

為村

民部卿殿

被入門之事、〈為村〉輕服之日數十一日終之間、其已後可
然、令存之由、談前中納言服中苦間敷、早速之方可^{18ウ}然
之由被申之間、明九日治定、謁戸部明日〈辛辰〉之間、為
入門、可被來臨之約定之者、初度之詠草可為堅紙之間、書
様内々申含題之事〈寄道祝／寄松祝〉、兩首之内、可然方、

治定之事、被尋寄遣祝、尤候由申之、明九日入門治定之事
申前中納言、其時節、彼卿來臨為檢知入門之式、被見候事、
示合了（内々及御沙／汰儀也、／一件之後、入門面会故、
／為擬知可有來臨也）、御許之後、戸部相共退出、予今日
參謝之所々（中書王亭 烏丸亭 八条亭）、戸部同參謝可
然之義、申合了、¹⁹⁾

九日、朝之間、從戸部以青侍、被饋越蹄（被添／于鯛）、
被謝申（入門殊蒙 院宣、畏悅之至、／習練長久隨從之由
也）、相悅之由即答畢、藤谷三位被來賀（民部少輔、依歛
樂／不被來）已刻斗前中納言來臨、戸部入來出會入門歛幸
之由申合、持參之一通被渡之、披見誓言之狀也、

誓狀云、

今度辱蒙

院宣、写冷泉門弟、受家說之上者、真実信一流之正説、
不混他之説、哥道習練長久之心願候、被伝候説（云々）、
¹⁹⁾不被免已前、他人（江）堅伝申間敷候、対師家、此後
不可致非礼候、（宗家）勿論猶至子孫、此条々可相守之
旨、可申伝候、此旨若於不実者可蒙
日本中大小神祇別而者、両神御罰者也、仍誓狀、如件、

寛延二年八月八日

宗家

右衛門督殿

右披見 神文頂戴了、握掌置文台之上（上之間、／床上置
／文台懷紙詠草之案紙／置之料也）、前中納言被出會、於
座上檢知、²⁰⁾民部卿藤谷三位予為泰等一座盃酌、各居昆
布匏布衣侍取酌（予取新盃飲之、授戸部々々／被巡三
品々々、有返盃、為泰請／戸部之盃飲之、返盃戸部可有返
盃之由申之、被返盃）巡盃了、撤献、予取誓狀置前中納言、
傍可有披見之事申之（後刻（為村）隨身參 院、／可入御
覽覺悟之由申）、此間家説作法等口授之（懷紙詠草之書法
／短冊之探様等也）、戸部謹承知了、家説先指當之事、少々
口授了之事、申檢知之卿（戸部同／被申）前中納言誓狀披
見了、被返之置本所、黄門先被入別之間、民部卿三位予為
泰等相共謁前黄門、今度之儀、一家一統畏悅之儀謝申、
²⁰⁾戸部被帰家前中納言、為檢知來臨之謝、且入門事、穩便
等之拝謝、勸祝酒、今日之儀言上、被急參 院之間、不及
数献、午刻斜被帰、
入門之式、無異靜鑑、以家奴申下、亭今存之、畏悅入門、
來臨之賀、饋物之謝等也（于鯛令饋之例入門之方、／雖不
及此義、一流之飯子、／榮一家之和順、畏悅／之表也）、
未刻參 院（路次向下家謝來臨之儀／不及対面）同時戸部

参院、相共謁前中納言、申畏悅之拜謝之後、以表使女房、拜謝之旨申新大納言、有即答、先刻持参之誓狀、以前中納言、入御覽、有御覽、返賜戸部、初而被窺詠草（附八条前中納言被覺之／誓狀一通被獻云々、）²¹才則給御点、畏存之由被告之、内裏院中御会詠進、更被仰下之事、同被告之、申刻斗相共退出、予参謝之、所々へ八条亭／烏丸亭へ各申置藤谷三位為泰等参院、相共畏悅之謝言上、退出、

十一日、参番如例、召御前、今度之畏悅事々謹言上、此序窺申誓言之内へ不被免已前／之所へ、如何可覚悟仕哉之事、窺申従師家、不免已前之儀也へ与蒙仰、尤先年御定有之上者、民部卿雖地下之哥、相談事如何可覚悟仕也へ与窺、勿論未不及其御沙汰義也へ与蒙仰、一々謹奉退御前、²¹ウ

十二日、今日内々御当座、民部卿被召初度也へ予今日依申沙汰、昨日窺定、短冊探樣詠草紙折様へ三折初度／也、不違家説へ年来短冊探樣者、用冷泉説、／詠草紙四折用二条説混用之儀、甚不快不審之所、今度／依被札明改浮説之事、幸甚々々、

九月十八日、参御前、民部卿進上之誓狀、写置度之事

願申、依御許、以自筆、於御座之傍、写之、

奉誓狀之写、

近世信浮説、二条冷泉領家之作法兼用之事、尤其謂不慥候、²²才此度蒙

院宣、請冷泉家之説、於詠哥者、駁賜

御点、謹深畏入存候、当家中絶之家説再興、弥守一説、永哥道逐習練、深可染心腑候、此条々於令違背者、可蒙両神御爵候、仍所獻誓狀、如件、

寛延二年八月八日 宗家

烏丸中納言殿²²ウ

去年八月五日、参院於御前、彼是言上、文言之内、一流嫡家へ与有度旨言上、尤之事、勿論難除四字也、然者此四字之事、已へ二而一件、不落着之事、甚御心劳也、一流嫡家之事者、可賜奉書之間、和順領承可然事、悉蒙仰之方、謹奉、重而不申所存事へ三存候へ八有及領承、宗家卿入門之後、重而御奉書之事、願申被聞召了、殊可賜宸筆御書之事、再三於御前、有仰、然処日月早移来、有御事、於于今者、無為方之間、彼仰無相違事、隆英卿始末存知之間、談往事之序、述愁

傷之言、但嫡家無紛事（八）、以相伝書卷、雖明鏡、既可賜

御書之事、及不慮之悲歎之間、殘懷之余、書一書、於旧殿、附彼黃門（右之文言、

追申、於于今者、御約之、仰無相違之証、致握草、度々去冬入一覽候、一帖之末とも写留度候、不存寄義申入候二付、／聖断之始末、今更恐入懷旧恐歎、雖書一筆謁之也）

去秋宗家卿当家門入之節、慈憐深重之 御恩畏存候、就夫御存知之通事、及窮迫之時、彼是辱

仰共（二）候、就中上冷泉者一流家嫡、勿論（二）被 思召候、為家嫡事、可賜奉書、猶可願申候事、

仰厚大之至故、為奉安 御心事（二）存候（八）、有師弟契約之事、応御沙汰候、其後御書之事、願申処、預御沙汰、既可賜 宸筆之御書之御沙汰、殊正理候、於 御前、（為村にも）再三蒙 仰候、然所戸部又出題之事、猥企願望之子細出来、時日移過候内、被為有 御藥事、至年末候、春來又御事、繁至初度又可願申存之処、不例御大變絶言語之外、無他候、雖然行之 御書御約已（三）而、不慮之悲歎、殘懷難散愁鬱之、心中可預御推察候也、

隆英卿返書、

覽後被仰丙丁可給候也、

七月一日 為村

八条前中納言殿」²³才

御翰拝写、去秋御当家宗家卿門入之節、鴻恩深二生御畏悅御尤致候、就文事、及窮迫之時、辱被蒙 仰、上冷泉家者、一流家嫡、勿論（二）被 思召候、為家嫡事、可賜奉書候、猶可存願申之 仰有之故、為被奉易 御心被存候（八）、有師弟契約被成、被応御沙汰候、所事御書之事、以（隆莫）被願候、及言上可賜 宸筆之御書、被 仰下、其節申入候、廻（二）候、於 御前其卿再三被蒙 仰候事（二）候、戸部出題之事、致企望時可推迂、且御藥事、被為有出年抄候、初春御用多初度可致願之処、不測御大變被隨言語之外無他、御書只御約也（三）而、不慮之悲歎、殘懷愁鬱被來之由、御心底、実以令愚察候、（隆英）委細令存知候事候故、御書不賜之事、残念候、此度大變蒙殊思、（隆英）就中驚歎愁傷日増慘感候、

淚筆不端可預推覽候也、 七月一日 冷泉中納言殿（同復） 隆英

後日此返書被越之、 御書御約之証、如此、寛延三年

秋注加之、(為村花押) 23ウ

右以

聖斷、戸部改不正之說、嫡家之正說、真実信仰之心願、発起随從於当門事、偏

神明之加護、

君德之淳恩、誠欲誠喜一道之幸慶、一家之和順何事過之、且御先祖之慈憐暮散、亡父之遺念、猶專習練、継家業、弥存忠信、勵公務之外、以何報謝之乎、愚痴瞤昧之、(為村)恐懈怠、旧嗣於正嫡之血脉、今蒙於

神君之恩惠、是非私之所為、祖々先賢之余 24才慶也、子孫

專正直可仰、明道一件之始末、為令知後世一帖書連之、爰

亦戸部之心中、於歌道者、随從之誓言、雖堅固嚴重、争嫡

庶之濁心、乍汲末流汚、本源不探得淵底之深志、難為水魚

之親服、雖不及書記、依有余紙黒世血脉、不断之系譜、採

要書加之、勿論当家為嫡々事、以相伝之書卷可為明鏡、恐

道之冥慮、長願血脉之相承、久以家業可奉仕、於

朝家者也、此一帖猥不可許外見(矣)、

于時寛延第二三已歲暮秋 家嫡後孫藤原(為村花押) 24ウ

(白紙二五才)

略系(私注、以下系図略)

「●俊成卿」(二五ウ)

「為相卿」(二六才)

「為純卿」——宗家卿(二六才)

(白紙二六ウ)

後遊紙二丁(二七丁目)

(後見返紙)

右一帖書連、納文庫之写也、予

依繁務、以人令透写之了、可納于

常之庫藏之料也、(為村花押)

後年道香公当職之日、入覽被歴

御覽、新写献上被 仰下、献新写(江留)

御所(其写一帖納庫藏)、宝曆七年夏

2 寛延二年十一月三日附下冷泉宗家折紙

出題之說、受教訓候事、思召子細有之候間、延引可然

之旨、今日於 御前被蒙 仰、仍被伝候事、延引之旨

承候、貴卿迄、内々相望候義不叶、

思召義二候ハ、尚又宜御取成、偏御頼入存候也、

十一月三日 宗家

右衛門督殿

3 『寛延二年十一月四日附飛鳥井雅香折紙（為村宛）』

追了、過刻者用事候而不能、即答候、示給之趣、雅重へも申聞之処、御念入候義、宜申入度由申候也、

御書中令拝誦候、誠昨日者、於

洞裏得其意、畏存候、抑民部卿被懇望候、出題之事、可被示伝之義、此間〈雅香江〉被示聞候故、難致承知由申入候二付、其趣被及言上候処、尤之儀、被 思召候、

御気色之由、殊此節戸部存違之願筋」被及聞食、不宜儀二被 思召之条義、被伝候事、被延引可然之旨、被蒙

仰候故、猶更御延引候、則戸部〈江も〉被仰達候由、令承知候、尤昨日於

御前奉候事二候得共、為念示給之趣、御丁寧之義存候、先々御延引二相成於〈雅香も〉畏悦之致存候、尚期面会候也、

十一月四日 雅香

冷泉宰相殿

附記 翻刻の許可を戴いた冷泉家時雨亭文庫に、衷心より御礼申し上げます。

（冷泉家時雨亭文庫調査主任／本学客員教授）